

No. 1 2年 高橋 心

『源氏物語入門』

高木和子／著  
岩波ジュニア新書  
(2023)



源氏物語という作品は授業などで度々触れる作品だが、物語の全体を知っている人はそう多くはないだろう。そんな源氏物語を書き下し文や口語訳とともに時代背景を踏まえながら解説していくのがこの本である。光源氏の晩年や息子・薫が主人公となる光源氏が死後の物語もある。少しでも興味が湧いたのであればぜひ源氏物語という作品への第一歩をこの本で踏み出してほしいと思う。

No. 2 2年 鈴木 晴斗

『探偵はもう、死んでいる』

二語十／著  
MF文庫 KADOKAWA  
(2019)



面白くて思わず一気に読みました。軽めのミステリーだと思っていたのですが、あっさり期待を裏切られた感じです。色々なジャンルが混ぜ合わされたような物語です。異能力やら、バトルやら銃撃戦やらバトル好きな人には突き刺さるだろうと思います。主人公と探偵とのやりとりが個人的にとっても好きです。

No. 3 1年 大平 素生

『英単語の語源図鑑』

清水建二／著  
かんき出版(2018)



英単語を覚えるのは面倒くさい、そう思っていないだろうか。本著はそんな人達の強い味方である。英単語には語源がある。例えば「attraction」なら接頭辞の「at」、語根の「tract」、接尾辞の「ion」で構成されている。そういった語源から英単語について学んでいくことで、英単語に対する理解も深まるし未知の英単語の意味も推測できるようになる。一見わかりにくくそうでも、本著ではそんな語源をイラスト付きで面白おかしく学ぶことができる。英語嫌いの人は是非一読を。

No. 4 1年 新保 怜央

『余命10年』

小坂流加／著  
文芸社文庫NEO(2017)



20歳で余命宣告された女性が、10年間必死に生きようとする切ないラブストーリーです。人間が生きる意味などを考えさせられます。

No. 5 1年 新保 怜央

『2.43 清陰高校男子バレー部』

壁井ユカコ／著  
集英社(2013)



バレー馬鹿な高校生男子が繰り広げる青春の物語です。個性豊かな仲間たちが、バレーボールを通じて、困難を乗り越えながら人としても成長していき、部員が一致団結して春高を目指していくというストーリーです。バレーを知らなくてもすごく楽しめて、バレーのルールや魅力を知るきっかけにもなり、一読の価値がある本です。

No. 6 1年 金谷 光

『アンマーとぼくら』

有川ひろ／著  
講談社(2016)



沖縄のおかあさんのもに久しぶりに帰省するリョウ。父の再婚相手であったおかあさんと一緒に3日間沖縄を巡る。すでに故人である父や、自分たちについての思い出を語り合う二人。そこで起こった優しい奇跡とは？「地元の人が巡る沖縄」の魅力と、リョウの中で起こる不思議な感覚が、とても丁寧に美しく描かれている。仕事や勉強で疲れてしまったときにぜひ。

No. 7 1年 武井 駿卓

『夜が明けたら、いちばんに君に会いに行く』

汐見夏衛／著  
スターツ出版文庫(2020)



主人公の茜と青磁、正反対のように見える二人の関係性が読んでいて面白い。優等生を演じるうちに心がすり減って言ってしまう茜の辛さも心に刺さるし、マスク依存症になってしまう点でも現代社会にあっている感じもする。疲れ切ってしまうようなときにも手を差し伸べてくれる人、応援してくれる人の大切さを実感できた。

No. 8 1年 地濃 光希

『星の王子さま』

サン＝テグジュペリ／著  
河野万里子／訳  
新潮文庫(2006)



『星の王子さま』を知らない人は、高生にはおそらくないだろう。第二次世界大戦のときに出版され、現在でも世界中で愛されている名著である。この本の魅力は、何と言っても「王子様」によって純真無垢な子供の心を思い出せることだ。砂漠で遭難している主人公と遠い星からやってきた王子様が一緒に過ごしたときのことを主人公が回想する形式で書かれている。二人のやり取り、王子様とその友人の美しい関係、王子様が地球に来るまでにあった変な大人たちの話から、大人になって子供の心を手放してしまった人への批判、失った心を感じる事ができる。とても大切なことを感じられる上にあまり長くないので読みやすくおすすめです。